イヴォンヌ・レイナーと反スペクタクル

東京大学大学院　武藤　大祐

1・問題設定

1960年代にバレエやモダンダンスのスペクタクル的性質を批判したジャドソン教会派，およびいわゆる「ポストモダンダンス」のダンサーたちは，平凡な日常を生きる人々の無名の身体とその運動に着目し，ダンスの再定義を試みる多様な実験を展開した。歩く，物を運ぶ，着替えるなどの日常の行為をダンスとして提示し，あるいは劇場外の空間に飛び出すことによって，彼ら彼女らが日常的なものを「肯定」し，あるいは日常の身体の動きに「美」を見出し，そのような仕方で生活と芸術の境界を取り払おうとしたのだという解釈は，当事者や研究者の間に広く見られる。

J・ケージの思想の影響が色濃いこのような見方は，しかし，本質的な矛盾を孕んでいる。すでにある日常をありのままに「肯定」しようとすれば，日常的なものへの過剰な視線の集中，すなわち日常のスペクタクル化による他はないからである。事実これまで多くの言説が，「日常」をめぐるジャドソン教会派およびポストモダンダンスの実践を特定の文脈（「前衛芸術」）に基づくフレームの作用に還元してきた。しかしこれでは結局，ダンサーたちが取り組んでいたスペクタクル批判の問題を，芸術内部の形式的な問題へと矮小化することになってしまう。芸術は日常に接近して新奇性を獲得するが，日常は芸術から何ら刺激を受け取ることはない。そして身体は再びスペクタクル（反スペクタクルというスペクタクル）の市場へと統合され，消費されていくだろう。

しかし当時のダンサーたちは，必ずしも日常的な動作をそのままダンスとして提示し，讃美し続けたわけではなかった。むしろ日常と芸術がせめぎ合う接点を常に意識しつつ，積極的な介入を図った。そしてその最も周到な作例の一つと目されるのが，レイナーの『トリオA』なのである。本研究では，映像とともに，特にテクストの分析によって，この作品が提起した争点を検証する。

2・分析と考察

よく知られるように，レイナーは『トリオA』を自ら分析してみせたエッセイQuasi Survey…において，既存のダンスと，ダンスを見る観客の視線のあり方が一定の仕方で制度化されている事実を指摘した。とりわけ重要なのは，フレーズ（動きにおけるエネルギー配分の形式）の構成の問題である。西洋のダンスの多くは，ある動きの始めに最大の出力（アタック）が行われ，何らかの部分で留め置かれた後，最後に元の状態に戻るようにエネルギーが配分されており，これによってフレーズ内で最も動きの少ない一部分がクライマックスとして焦点化されることになる。レイナーはこのような動きの様式を「過剰にドラマティック」であり「不必要」と退ける。

なぜフレーズ化は否定されるのか。レイナーは上述のような仕方で動きを認知する目の働きを「写真」に例えている。つまるところ問題は，このようなダンスが観客に対して，踊り手の身体感覚とは区別される，純粋に視覚的（スペクタクル的）なエネルギーの仮象を提供する点なのである。レイナーによれば，観客にとっての見かけのエネルギーと，踊り手の身体が費やす実際のエネルギーはそもそも一致しない。しかしフレーズ化のような修辞はその分離をさらに押し進め，観客を視覚に耽溺させ，しかもそのメカニズムを隠蔽する。

スペクタクルに対するレイナーの問題意識は，1968年の上演時における声明においてはっきりと示される。「TVに映るヴェトナム人が撃たれる場面――ただその死の光景のみならず，TVを見終わったら，まるで出来の悪い西部劇のようにパッと消してしまえるのだという事実」は，「私と，危機にあるこの世界」，さらには他者との疎遠さを痛切に物語る。

しかしレイナーはもはや，初期のジャドソン教会派が行ったように，「より現実的（matter-of-fact），より具体的，より平凡」な身体の提示（歩く，物を運ぶなど）が，行動のただ中にある者と，それを見る者とをつなぐ共通の「現実」を提供し，身体の疎外を回復するとは考えない。その代わりにレイナーは，修辞的分節のない，また日常動作に近い質（速度，エネルギー）を保った，平坦な一続きの動きによって「現実的」な見かけを作り出し，同時に，そのような見かけを作るために必要とされる身体的労力を故意に露出してみせる，という入り組んだ戦術を仕掛けるのである。

このような「現実」と「見かけ」とのアイロニカルな重層化は，ダンスにおける視覚的効果を否定することもしなければ，「現実的」な身体感覚をありのままに肯定することもしない。むしろスペクタクルの存立構造を剥き出しにし，日常性と作為性（＝芸術）との間の弁別さえ不明瞭化する。その時，観客の意識は絶えず何か単一の「現実」にとらわれることなしに，自らの知覚への反省を触発され続けることになるだろう。

3・結び

今日ジャドソン教会派以降のダンスの歴史を振り返れば，「日常」の直接的な肯定がただちにスペクタクルへの批判たり得た期間はごく短かった。そのような中でレイナーの『トリオA』は，日常とスペクタクルが分離する構造そのものを扱ったことで，今もその批評性を失わずにいるのである。